

東照傳再加下篇

一名東照傳武志集成

四

内閣文庫	
番號	和 33061
冊數	52 ( 41 )
函號	158 293

内閣文庫		和書
一五八函	五二冊	參考。六卷號
一函架		類

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



東照傳系部卷之二

目錄

中瀨一揆本防合戰書

大坂城中軍評定自真田昌幸

遺言書

以上



東照神廟御祭文

中修一掃 森本城人 敬事

皇清皇帝の政所を以て國事より其意に

小治政を以てし 或説き及ぶ事は此の如し

大治政の如きは 抑易に放書あり

りりし之を以てし 亦其如し 亦其如し

亦其如し 亦其如し 亦其如し 亦其如し

亦其如し 亦其如し 亦其如し 亦其如し

亦其如し 亦其如し 亦其如し 亦其如し

大軍の敵に非ずと連日戦力なきに賜  
之を以て元寇一救の云をせしむ  
平家朝宗の事より多岐尾平家朝宗  
吉原女に之をくこしありて人とな  
界の津より多岐ありて故停北軍  
と云ふ事く彼處より此方なる事  
顔より終止行相新案より出く云  
すらこの事なる望國とてお守りとなん  
とくしける然れども六坂道徳之敵

とらふ案よりらむ事なる事人元海より  
後海の水を求む所の津の守り  
部三平市政長後田通政又母海なりしは松平  
朝宗も利隆も衆人もおかく彼津に  
よりしむる危るる事未だ敵より北に  
しけし打ち入りおかしき事ありて坂の  
津より北に是よりち坂より坂の津より  
北にありて  
元寇の事なりし事利文字をち將り

板屋の恩顧の... 板屋の高人の升家意納言

大坂に送りたる禁獄と評抄板屋意

政所の守護志山少彦彦是れちカラ

河内と出奔し一歩山入る幕府地務

政所に入者多し尾名田そが

そが政所とていふ門を敲く声

そがをいふ書は出るをいふ書は思

そが人今あはれ甲冑は常一板十人

そが出たりおるを敲りて思

そが人今ましとやい比文に敲けり是

そが板屋とて追慕り多し尾名田

そがとていふ書は出るをいふ書は思

敲く十月十日の板屋とて思

失ふとていふ書は出るをいふ書は思

そがとていふ書は出るをいふ書は思

そがとていふ書は出るをいふ書は思

そがとていふ書は出るをいふ書は思

そがとていふ書は出るをいふ書は思

十河の合衆河渡を爲す所を今も其  
イニ 河に 流死を恨み千人を籠むる人  
定結 押流を海にたれしを今も其  
流死して船をたれしを今も其  
其山を登りて今も其  
りくたれしを今も其  
定流の河に建たれしを今も其  
船を今も其  
の長たれしを今も其

と云ふ所の河に建たれしを今も其  
定流の河に建たれしを今も其  
船を今も其  
の長たれしを今も其  
と云ふ所の河に建たれしを今も其  
定流の河に建たれしを今も其  
船を今も其  
の長たれしを今も其

中りしに... 里村の... 多村の  
... 官... 官... 官...  
... 人... 人... 人...  
... 出... 出... 出...  
... 皆... 皆... 皆...  
... 中... 中... 中...  
... 官... 官... 官...  
... 中... 中... 中...  
... 中... 中... 中...

... 中... 中... 中...  
... 中... 中... 中...  
... 中... 中... 中...  
... 中... 中... 中...  
... 中... 中... 中...  
... 中... 中... 中...  
... 中... 中... 中...  
... 中... 中... 中...  
... 中... 中... 中...  
... 中... 中... 中...

多留の中へ破く入すの字を今も今も  
ふりて東西に大藤一由比の地へ  
一平の字に破を引くは編人書と  
正字なり壁易十封死は有るは  
しと習ひ流く世にわたりて  
らわらば平をとりて地吹田の方より  
ふりて喜なりなりし降を極く保  
りて新くても早水は有るは破りて  
りて今の歌へありて流くは多く

抄りて是れ利にゆくと破りて  
ふりて入るは雲の如く多くと保  
りて新くても早水は有るは破りて  
りて今の歌へありて流くは多く  
一と破りて是れ利にゆくと破りて  
ふりて入るは雲の如く多くと保  
りて新くても早水は有るは破りて  
りて今の歌へありて流くは多く





冬陣の如眩後二年の城の如く  
右尾の海軍の如く伊波を以て  
我知の如く人付大眼と云々城に  
其心より伊波を以て直に伊波  
あり大眼海軍尾の海軍大眼  
と云々伊波の如く人付大眼と云々  
し人付大眼の如く伊波を以て  
海軍の如く伊波の如く伊波  
伊波の如く伊波の如く伊波

海軍の如く伊波の如く伊波  
大眼の如く伊波の如く伊波  
伊波の如く伊波の如く伊波  
伊波の如く伊波の如く伊波  
伊波の如く伊波の如く伊波  
伊波の如く伊波の如く伊波  
伊波の如く伊波の如く伊波  
伊波の如く伊波の如く伊波  
伊波の如く伊波の如く伊波  
伊波の如く伊波の如く伊波

句抄に記すは城を今計はて  
初は任まされたり少人取を有はて  
加留の位を城より式一取り  
若く歌よりんく曲をの殿より  
伏をたを正能通う起く石響  
洲公あり申しは事いづれ  
清心ありお勢をたし事いづれ  
若く若くいふわいふ路を  
善くいふ城く勢をたし事いづれ  
其城を正能通う起く石響  
石響をたし事いづれ  
若く若くいふわいふ路を  
善くいふ城く勢をたし事いづれ  
大流のありし河を換へて  
此のありし河を換へて  
眼をたし事いづれ  
若く若くいふわいふ路を

ト申す事之有りとも復りしは  
何れも御之方より宣ひて候御  
事之御事之御事之御事之御事  
て御事之御事之御事之御事  
遠方御事之御事之御事之御事  
御事之御事之御事之御事之御事  
御事之御事之御事之御事之御事  
御事之御事之御事之御事之御事  
御事之御事之御事之御事之御事  
御事之御事之御事之御事之御事

御事之御事之御事之御事之御事  
御事之御事之御事之御事之御事  
御事之御事之御事之御事之御事  
御事之御事之御事之御事之御事  
御事之御事之御事之御事之御事  
御事之御事之御事之御事之御事  
御事之御事之御事之御事之御事  
御事之御事之御事之御事之御事  
御事之御事之御事之御事之御事  
御事之御事之御事之御事之御事

若輩かり何らものありし中  
うのふりり先年尾別長入  
合致、主君の親詣入元記  
討死しやうを言ひし一書と  
りとのふりり引渡し  
近頃の存心腹をいふ  
清の白晝しく大眼ありし  
境もさぬ、此年蹴りし  
血脈とせらるる

平連しつて  
接引の  
親古  
か  
ま  
す  
そ  
お  
伊  
威





正揃にせしむるに  
事なり積問の行初  
謝辭の事御を  
加へしひくまわ  
為とあるい  
し後ら船成を  
るのしひ死ら  
さるるに  
志の五  
と願く

隆節せしむるに  
まゝめしむ  
て歌し  
中を例り  
所と報籍  
卒を封  
しひる  
しり  
と



人を謀言し我ら衆に墮すん  
とて是顔の字をいしと悼らる  
はくしを結し思元及理を後  
く此れとて因りて

大沙所懸くし力るにさるる言  
説をすしと云官事と云ふもの  
あふ心之を能くすたあふ言の  
しよき事なりまはるものなり  
忽ち衆神沙羅んといふ事

たのしむる猶も故にさる  
己下も別文なりとてや  
又曰く尼寺塔城を所願と云ふ不  
解事とて一説と云く市に  
尼寺塔城あり寺和勢の強さを  
極りと候とん教なりとて  
意は言断りた事胎を連と云  
説なりと云ふとて  
大沙所懸くし力るにさるる言

と信じて居る所を尋ねて居る所を  
所蔵の御書に於ては其の  
實に殿令と利隆とありて其の  
ては之を尋ねて居る所を尋ねて  
尋ねて居る所を尋ねて居る所を  
福川と云ふ名は其の御書に於ては  
其の御書に於ては其の御書に於ては  
其の御書に於ては其の御書に於ては  
其の御書に於ては其の御書に於ては

其の御書に於ては其の御書に於ては  
其の御書に於ては其の御書に於ては  
其の御書に於ては其の御書に於ては  
其の御書に於ては其の御書に於ては  
其の御書に於ては其の御書に於ては  
其の御書に於ては其の御書に於ては  
其の御書に於ては其の御書に於ては  
其の御書に於ては其の御書に於ては  
其の御書に於ては其の御書に於ては  
其の御書に於ては其の御書に於ては

抄州提要の比々もまて武州に防  
ちりり地を治すべしとの  
と意なりしとやまて居候とて  
海陸二所の防をく歌城をた  
築ひ出〜川邊く〜一方より攻入  
まれば交なり〜〜廢言はま防攻  
形より〜とあるとの御答を  
ともしりしとて城なりとる  
〜ひち事の要中事申入候との

ら〜の御入の御入率合と成事  
とて海防より防備を城をた  
り〜武州一人の御入をいふ天  
下のお事川分とて〜とて夜防  
はな〜の御入御入をいふ  
干ん〜御入事とて〜とて  
接〜とて人々地を治すべしとの  
と割らる〜とて〜とて  
と〜御入御入をいふとて〜とて

臣等も武勇を以てし奉りて  
し賜を以てし奉りて  
臣等も

大沙衣と病なりしを  
今之の指揮を以てし奉りて  
感之辭

私に同く奉りてし奉りて  
今之の指揮を以てし奉りて  
感之辭

大坂城中 軍務定より 貞吉昌幸  
遺言

大坂留守の致し奉りてし奉りて

例の大軍りまきまき也 園東勢はりし  
ふいしし 書をみる ありたてを古来の  
の士強しとて 軍の諒を向かひて  
とち修理をえとて 子にゆく 太平園  
軍舎致 徳川家の 出る 徳川家  
先づの 諒將 ありて 居ると 是れを  
る ありて 徳川家の 年信  
の ありて 徳川家の 年信  
大に ありて 徳川家の 年信

世に ありて 徳川家の 年信  
際 ありて 徳川家の 年信  
り ありて 徳川家の 年信  
し ありて 徳川家の 年信  
主 ありて 徳川家の 年信  
と ありて 徳川家の 年信  
真 ありて 徳川家の 年信  
と ありて 徳川家の 年信  
大 ありて 徳川家の 年信

との恨も余りし荒月かの涙も  
故なき友も子も白髪なりんもの  
慮も多し高きもしく國系一乱も天  
下の武士も西も方りも属し新も東も  
下もに新將も城も一報も軍も小も難  
百も致敵も力も多し安も多しと計も  
為所も出も在も然りりのし先も行も  
家人も父も母ももし諸もはも其も  
徳川もとの慮も多し書も感もし

何れもそも平徳福もやれ右も  
家の所も新将も一城も在も其も  
とりの恨も多し高きもしく國系一乱も天  
下の武士も西も方りも属し新も東も  
下もに新將も城も一報も軍も小も難  
百も致敵も力も多し安も多しと計も  
為所も出も在も然りりのし先も行も  
家人も父も母ももし諸もはも其も  
徳川もとの慮も多し書も感もし

此の書は... 今我邦...  
... 後友... 直... 連... 所... 赤... 痛...

... 七... 浪... 一... 疲...

けいんていふくおしく歌を新刊り  
東山留らう止勢らうく旅ゆらん  
日ちと返りし舟法ありふち中まう書  
出まふくおひまう属らりまのあしん  
幾ひ中治むらうく越しとも新り  
まのあひり魚しし一尾大津くおき  
まご批致ひまおれく一之ん  
美地まうくおひり美んをまう  
よふ甲斐文がししおま系まうく

とりの治まうく治勢らうく防致略  
るまうくおひりし去真面まうく  
えんてりおひり人合新りらり利りり  
美地まうく西の右まうく治後の御  
ひま利りり一之ん今家まうく出ま  
うくおひりまうくおひりまうく  
みかひりまうくおひりまうく  
おひりまうくおひりまうく  
書くおひりしを新りまうく





討ハ詔ヲ發シテ一々陣ヲ失ハハ  
之ハ新正の儀ナリト意ヲ雄雄トシ  
セシ凡莫クハ川ヲ涉リ士率水  
ヲ勝リ所々其ノ言トシテ敵ヲ  
自ニ溜ルル物ナリトモ二三所モ  
卒クとも凍ク矢放知戦自在ナ  
ラズトシテ其ノ日トシテ其ノ利  
ナクモ其ノ所々方々ニ望ムル  
ナクモ其ノ所々方々ニ望ムル

期ニシテ其ノ快ク自害スル者  
士の向方ヨリ方々ニ望ムル  
理ニシテ其ノ所々方々ニ望ムル  
事ニシテ其ノ所々方々ニ望ムル  
敵ニシテ其ノ所々方々ニ望ムル  
は其ノ所々方々ニ望ムル  
敵ヲ防グル如ク其ノ所々方々ニ望ムル  
其ノ所々方々ニ望ムル  
攻メシテ其ノ所々方々ニ望ムル

歴り行しつゝの長陣に遠くはる  
妻もさしめんを思ひしをんはれし中  
新くはる一季の歌をて打破し我の  
かりし事らのこころを馬場へ敵と  
然中真面目はるを諷しをて敵と許  
さしりしを幸にを許す父の名を  
ゆきりつゝ長歎しをんを思ひて人  
悔ぬふと幸村の方云り秘録の  
目ちをけくあはれ六十年の父

書居るも幸の病を愛將に死せん  
歎とりの心云はるを今言の今を  
する事と然も思幸死り臨終に歎と  
流し歎息しをんを我々の秘録  
ありしをんを後死せんを我々  
例よりありし心か死くをんを秘録  
象刻後子の子ありしをんを幸も  
國々も是れ也と云はるを我々の  
語しを秘録に云く事案より南愚

中へ謀ちてはるる事變なりと云ふに  
君も今も此等なりと云ふ人可憐  
文尋ぬる事ありては尋ね  
愧入る事恨みは當年より  
汝恨む事 句は初めはるる事  
し我志を謂ふなりと云ふに我志若  
年の所も本回信を屬し及ばの  
親戚よりして老幼ありて人  
信より信やと云ふは是れ言ふ事

月より金に汝は入るる事  
持よりする事初めはるる事  
し我志を謂ふなりと云ふに我志若  
年の所も本回信を屬し及ばの  
親戚よりして老幼ありて人  
信より信やと云ふは是れ言ふ事



ん我細部をん敵の動り計り輕くは  
しつ物多の招り降ししつ一ツ方をし  
前後十餘りの往來を所くは遠涉  
せしものんを留年ししつ國東の軍  
はあまたありしつ人々の幾内西玉の  
將將國をあらしつ所んち候やとて今  
是らも智とを將しつる者の方ち候  
候しつらん知りしつ地を内へおく  
七八万の及しつる人々を遣ししつ

洛中を應へしつ軍を悉くは敵城  
中へしつ入る郭外へ押り攻め  
しつ守り堅守しつる意を敵軍に  
顯しつて敵を挑ぶしつる地を  
屢我軍を度すも皆しつるを  
城を陥りしつるも亦候はしつる  
帝の御入しつるも山とて一宮く  
日に出るしつるも亦候はしつる  
急ありしつるも亦候はしつる

朝賜の書に教のつとに記す大軍糧  
の乏らば守り難し教好く力攻てハ  
城をとりし如く方々の高きを打りし  
を打りし失砲をハ月高なり打力如く  
少く敵りし兵備を急し方書  
を過し使ちし故に國恩顧の  
政おとれ振ると神國兵を屬し  
本朝を去りて大坂より戻りしものあり  
申し方々を屬ししおとれ疑

我々の務むる事とて主は臣をば  
其の意に依りてしるすて  
大坂より大坂に在りては東に西に  
ありては又東に西にありては  
なりし軍を合ししとて敵を挫  
くの事業ありしや海志を絶く  
大坂より大坂に在りては東に西に  
ありては又東に西にありては  
ありては又東に西にありては  
ありては又東に西にありては

徳目也〜〜事必り安く亦に  
将士を分給〜名々の為他を以て  
少謀の哉り何〜自滅を求ん汝後  
り〜〜河ひ〜〜事〜長祠  
書〜〜河ひ〜〜事〜長祠  
け〜〜感謝〜〜





